研究ノート

コロナ禍において可視化された発達障害児の体験格差と生活保障の必要性

川邊　浩史

（西九州大学短期大学部　幼児保育学科）

（令和５年３月 13 日受理）

Experiences Disparities of Children with Developmental Disorders Visualized in the COVID-19 Disaster and the Need for Livelihoods Guarantee

Hirofumi KAWABE

(*Department of Early Childhood Education and Care, Nishikyusyu University Junior College*)

(Accepted March 13, 2023)

Abstract

Children with developmental disorders may lack life experiences due to their characteristics. Accumulation of daily experiences leads to self-affirming and self-esteem. Therefore, the lack of experience is serious problems for children.

This study surveyed guardians of children with developmental disorders about their children's life experiences in the COVID-19 disaster. We compared daily life experiences that were lacking with those that were lacking due to the COVID-19 disaster.

Based on these results of this survey, we discussed livelihood guarantees that will be needed in the future.

Keywords:　発達障害：developmental disorder
コロナ禍：COVID-19 disaster
生活保障：livelihood guarantee
体験格差：experience disparity

1. はじめに

本学では筆者が担当する科目として、2012（平成24）年度から発達障害児を対象とした支援活動を実施している。この活動は保育を学ぶ学生が中心となり、授業の一環として地域在住の発達障害のある子どもとその保護者を学内に招き余暇活動の支援を行うものである。活動は年間を通して開催され､月例会と季節行事に分けられる。季節行事の一つである夏休みのレクリエーションキャンプ（以下、キャンプと表す）は、自然体験や集団生活を通して社会情動的スキルの醸成を目指している｡その為、スタッフは学生のみならず、保育士等として保育あるいは障害児・者関連事業所にて就労している卒業生や野外活動等の専門家にも参加・協力を要請している。

キャンプは2013（平成25）年度より実施しているが、2020（令和2）年には、日本国内で猛威を振るい出した新型コロナウイルス感染症の影響で開催中止を余儀なくされた。その翌年も中止を検討していたが、ワクチン接種が開始されたこと、参加家族からの要望もあり再開することとなった。開催を決めたものの、コロナ禍で宿泊を伴った集団生活を行うにはかなりのリスクがあった。特に持病のある子どもに関しては、ウイルス感染による合併症等も危惧され、キャンプ参加については参加者への十分な説明と配慮を必要とした。再開したキャンプは、例年と比べて参加者は少なかったものの、参加者アンケート[1)]では､「コロナ感染予防が十分に配慮されていた」といった声に加えて､全体の満足度は90%となり､「参加してよかった」という声が多く聞かれた。

このように参加家族の要望もあり、感染リスクのある中でキャンプを実施したのだが、それにもかかわらず保護者が参加を切望した背景には、子どもの生活体験の不足の存在が窺えた。キャンプに参加する発達障害のある子どもは、その障害特性により健常児と比べて、もとより生活体験が少なくなっているのは明らかである。それに新型コロナウイルスの流行が追い打ちをかけ、さらなる生活体験の不足を生じさせたのではないかと推測される。以上の経験からコロナ禍によって可視化されてきた子どもの体験不足や保護者の思いについてキャンプという活動を通して何を得て、何が課題となっているのか整理しておく必要がある。

健常児にとってキャンプとは自然体験等の非日常体験を通して自然の豊かさを知り、そして自己覚知へと結びつく活動と言えるだろう。しかしながら、発達障害のある子どもにとってキャンプは単なる非日常体験ではなく､将来の自身の日常生活スキルにつながる体験である。キャンプには、野外炊飯や川遊びといった日常生活動作や身体的スキルを必要とする活動がある。また、集団で活動する自然散策やレクリエーションといった社会性を必要とする活動がある。発達障害のある子どもたちの特性は多種多様だが、これらのスキルや社会性の獲得に大なり小なり何らかの課題を抱えている。その為、キャンプを運営する際には、活動内容の自由度を確保する為に個別化したり、予定が分からずパニックになることを予防する為にスケジューリングを明確にするなどの配慮を必要とする。また子ども一人ひとりにボランティアスタッフが担当として傍につくことで、子ども同士のトラブル等について、その場で丁寧な対応が可能となるよう配慮している。こうした配慮の中で、キャンプへ参加することで、子どもの中に自立心が芽生え、生活スキルが向上するといった効果が期待される。

以上のように、発達障害のある子どもにとってキャンプとは非日常体験というよりもむしろ日常生活に直結した生活保障の機会と捉えることができる。そして、保護者にとっては子どもの成長を目の当たりにできる機会と位置づけられる。

そこで本研究では、コロナ禍で明らかになってきた発達障害児の体験格差とコロナ禍におけるキャンプ活動の意義について可視化し、失われた体験活動を保障する為の手立てについて検討することを目的とする。

2. 方　　法

1）対象及び手続

毎年開催される夏のレクリエーションキャンプに参加する保護者14名を対象にWeb調査を行った。Web調査を実施するにあたり、本研究の主テーマとなる「生活体験」をはじめとする各専門用語について回答者の共通認識を図る為、対面で説明会を開催し、子どもの体験活動（直接体験、間接体験、疑似体験）における生活体験の位置づけ、その具体例、調査の記入方法について説明した。その後、保護者各自でWeb調査に臨むよう教示した。

調査項目は、生活体験活動に関する例示をした上で、属性（子どもの年齢）、①コロナ前に行っていた（行う予定だった）体験活動と行っていた理由（目的）、②コロナ以前にやってみたいと思っていたけれど、実行できなかった体験活動と実行できなかった理由、③コロナ前とコロナ禍で特に変わらず行っている体験活動と変わらず行えた理由､④コロナ禍の｢夏のレクリエーションキャンプ」に参加している理由の4項目を設定した。

2）調査期間

令和4年7月6日～令和4年7月15日

3）倫理的配慮

全対象者に対して研究の目的、方法、個人情報保護方針、回答の自由を書面と口頭にて説明し、同意を得た。今回の調査における個人情報は年齢のみである為に匿名

化は行っていない。なお、本調査は、西九州大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得て実施している（承認番号 22NTD-01）。利益相反が生じる内容も含まれない。

3. 結　　果

回答は保護者 14 名全員から得ることができた（回収率 100%）。対象児の平均年齢は 8.4 歳だった。年齢以外の設問は記述式の為、内容分析を行った。設問毎に結果の概略を記述する。なお、表１～５に示しているＡ～Ｎは保護者 14 名を指している。

【設問①】コロナ前に行っていた（行う予定だった）体験活動と行っていた理由（目的）

14 名中８名から回答があった。残り６名の内２名は問に対する回答となっていない為、結果から除いた。また６名の内４名については、無回答だった。８名の回答について保護者の意見が伝わりやすくするために極力原文のままとした。一部、表現について記述内容に影響ない範囲で加筆･修正し掲載した。なお、理由については、活動の目的や心情が表現されている箇所を強調（下線）して表記した。また、表１の項目に「活動内容」「理由」と表記しているが、それぞれ質問項目「コロナ前に行っていた(行う予定だった)体験活動」「それを行う予定だった理由」を簡略化したものである。さらに、「活動内容」は、保護者と子どもが互いに納得して行っていた（行う予定だった）活動を意味している。

表１から、コロナ前に行っていた活動の多くは生活内の行為や行事ということが分かる。しかし、その目的は多岐にわたっており、活動そのものへの期待（楽しみにしている）、日常生活動作（ADL）の獲得を目指すケース、最終的に本人の自己肯定感の向上を期待するケースであった。

全体的に活動理由が生活上のスキルを身に付けるといった点、日常生活の中で健常児が発達と共にほぼ自動的に獲得していく日常生活のスキルを敢えて意図的に取り入れており、このことは、障害特性により日常的な生活体験が十分に得られていないことも示唆していることが読み取れる。

表１　コロナ前に行っていた（行う予定だった）体験活動

ID	活動内容	理由
C	洗濯たたみ、くつ並べ、食器ふき、お風呂掃除、棚の拭き掃除、台ふき、地域の清掃活動（年に二回）	将来の自立のため。人の役に立つ経験を積むため。自分に自信を持てるようになるため。
F	料理の手伝い（玉葱や人参の皮剥き、玉子を割って混ぜる等）、草むしり、じゃが芋掘り、自転車遊び、縄跳び	楽しみのため。
G	ゴミ拾い、料理の手伝い、自転車、公園通い	主に体力作り、生活面のレベルアップ
I	屋内での遊戯施設の利用（体をつかったあそびができることろ）、アウトドア（川や海で魚釣り、BBQなど）、自宅で友達と遊ぶ、少年自然の家のイベント、屋内外のプール	子どもが好きな活動だったから
J	いとこの赤ちゃんが生まれたあと、産院で対面する。またその後お宅に遊びに行く。（出産するお母さんや赤ちゃんに触れる）	妊婦さんや赤ちゃんに触れてほしかった
K	1. 電車、バスに乗る。 2. 歩いての登下校。	1. 公共交通機関を使って自力で移動出来る手段を知ってほしいから。将来の生活でこれを活かせれば、通学や通勤などの活動範囲が広がるから。 2. 体づくりや筋力をつけるため、同じ帰り道の人と話しながら交友関係が広がってくれると嬉しいという母の思いで歩いていた。当人は疲れるから歩きたくないという思い。
L	コンサートやワークショップへの参加	本人の好きなものを見つけるきっかけとして。
M	近所のスーパーへのおつかい	お金を使うということを体験して欲しかったため。計算の練習にもなるし、一人で出来ることが自信になればと思ったため。

【設問②】コロナ以前にやってみたいと思っていたけれど、実行できなかった体験活動と実行できなかった理由

14 名中９名から回答があった。９名の回答について【設問①】と同様に記載した。また､表２の「活動内容」「理由」の表記は「コロナ以前にやってみたいと思っていたけれど､実行できなかった体験活動」と「実行できなかった理由」を簡略化したものである。さらに、「活動内容」については、子ども自身の意思を汲みながら、保護者が子どもに体験させたいと考えた行動という意味である。

表２　コロナ以前にやってみたいと思っていたけれど、実行できなかった体験活動

ID	活動内容	理由
A	旅行	感染者の多い県だったので用心のため
C	包丁や火を使った調理。	時間と手間をかける余裕がなかったから。
D	バルーン搭乗体験（自然体験として）	コロナによって開催中止となったため。
G	親戚の家への宿泊	コロナ感染拡大防止のため
H	旅行（電車又は新幹線に乗って）	県外への移動自粛のため
J	いとこの赤ちゃんが生まれた後、産院で対面する。またその後お宅に遊びに行く。（出産するお母さんや赤ちゃんに触れる）	病院への出入りはかなり厳しくなり、家族も限られた人しか行けなくなりました。

K	1. 飛行機に乗る。 2. 映画館に行く、観る。 3. 服をたたむ。 4. 脱いだ靴を揃える。 5. ぞうきん絞り。 6. 野菜を洗う、切る。 7. 風呂で体を洗う。 8. 虫の観察（蝉の抜け殻など）。	1. 行く機会がなかった。大きい機体や大きい音を怖がっていたので、徐々にと考えていた。 2. 暗い部屋、大きい音響を怖がっていたので、徐々にと考えていた。 3・4・5・6・7. 手本を見ただけで真似るのが難しい様子。言葉で説明を添えながら手本を見せていくのに疲れてしまった。これに時間を割いているうちに先の予定に間に合わなくなり、中断することも。 8. 興味の幅を広げてもらいたいと誘うも全く関心なし。こちらとしても強い関心を持っているわけではないので、頑張って誘うことに疲れてしまった。
L	・新しい習い事を始めること ・地域活動に参加すること ・日常の買い物	・習い事自体が限定的となり、今始めなくてもいいかと思っていたら月日が経ってしまった。 ・地域行事は、人数制限が設けられたため不可能に。 ・買い物は、本人は好きだが、極力短時間で済ませるため同行させないことが多い。
M	祖母の家に一人で泊まること	コロナで祖母の家にもなかなか行けなくなり、その後本人が忙しくなってきたためタイミングを逃してしまった。

表2はコロナ禍の影響による活動の制限について尋ねており、当然、活動の原因にはコロナの記述があるが、コロナ感染予防の為といった直接的な要因もある一方で、コロナ禍が社会に及ぼした間接的な要因、例えば、人数制限や移動制限による行動制限が目立っている。

【設問③】コロナ前とコロナ禍で特に変わらず行っている体験活動と変わらず行えた理由

14名中11名から回答があった。11名の回答について、これまでの設問と同様に記載した。表3の「活動内容」「理由」の表記は「コロナ前とコロナ禍で特に変わらず行っている体験活動」と「行えた理由」を簡略化したものである。

表3にはコロナ前後で変わらない活動を記述してもらった。活動内容の多くは日常生活（お手伝いなど）、習い事、個別あるいは家族単位の活動となっている。これらの活動が可能だった理由として記述をまとめると、「屋外」「家庭内（家族のみ）」「限られた人との接触」が抽出された。この結果は【設問②】と連動しており、コロナ禍で実施できなかったこと以外が理由として挙げられた結果となっている。

表3　コロナ前とコロナ禍で特に変わらず行っている体験活動

ID	活動内容	理由
B	地域活動（子供会など）で行う花の種まき みかんの木を育てて収穫までの作業	野外活動の為、密にならずに開されたので続ける事ができている。
C	洗濯たたみ　食器ふき お風呂掃除 棚の拭き掃除　台ふき	スケジュールに組み込む。約束表をつくり、おこづかい制にしたから。
D	マスク着用になったが、習い事は変わらず続けている。 生活体験も、特に変わらない。	習い事は本人が希望していることや、家庭内でも習い事は嫌がらない限り続けるという共通認識があるため。
E	家の、お手伝いをしてお小遣いを貯めている。 お小遣い帳で管理しながら買い物をしたりもしている。	家庭内で親と一緒に出来る事や、買い物も身近で可能だった。
F	料理の手伝い（玉葱や人参の皮剝き、玉子を割って混ぜる等）草むしり、じゃが芋掘り、自転車遊び、縄跳び	定期的な集団の活動ではなく、不定期な家族や祖父との活動だったから。
G	料理の手伝い 自転車	家庭以外の人との関わりがないから
H	習い事（野球）	屋外だった為
I	川遊び	感染をあまり気にせず活動できるから
K	1. 牛乳を注いでレンジで温める。 2. 庭の草むしり。 3. 自販機で飲み物を買う。 4. ご飯をよそう。 5. ショッピングカートを店内で押して歩く。 6. ショッピングバッグを運ぶ。 7. ピアノを弾く。 8. 自転車に乗る。	1. 牛乳を飲みたい欲が勝り、注ぎ方とレンジの操作を教えたらすぐに覚えられたから。 2. 私自身が草むしりをしながら「手伝って！あなたの力が必要なの！お願い！」と頼んだら渋々ながら付き合ってくれたから。 3. 飲みたい欲が勝り、操作を教えたらすぐに覚えられたから。 4. 白ご飯が大好で、手順を教えたらすぐに覚えられたから。 5. 車の運転が大好きなので、車の見立てて押してくれるから。私が商品をカゴに入れる時には「停車」してくれるから。 6. 母親が体調を崩した時などに「お母さんの助けるために僕が運ぶ！」と言ってくれたから。 7. 子供自身がピアノを習っているから。音楽のある環境は好きだから。 8. あまり外遊びが好きではないため、日光を浴びせさせたくて。ただ誘って無関心が渋々。車を運転している感覚になれる自転車で出かけることを提案すると、すぐに誘いに乗ってくれる。私自身もストレスなく外に連れ出すことができる。
L	公園にいく 自転車でおでかけ 自宅で料理を手伝う（材料切り） 祖父母宅に行き、そこの近所住民と交流したり、地域行事に参加する	公園…外遊びが好きなので、年齢的にもむしろ機会が増えた。 自転車…人との接触が少ないので 料理…自宅の中でできることは、極力制限したくない 祖父母と…母親にとっても旧知の間柄なので、自然と子供も親しみを感じているらしく、現住の近所よりも交流が多い。また、祖父が地域の班長をしているため行事に参加しやすい
M	家の前での外遊び、近所の小さい子と遊ぶ、など（コロナで、より仲良くなった）。	近所の子供たち休校、自粛でどこにも行けず、家の前くらいしか外遊びが出来なかったから。

【設問④】コロナ禍の「夏のレクリエーションキャンプ」に参加している理由

14名中13名から回答があった。13名の回答について、これまでの設問と同様に記載した。

表4からも分かるように夏のキャンプに対する記述内容は他の設問と比べて多く、この活動への思い入れや期待が現れていると推測される。この設問については、内容分析に加えてテキストマイニング（KH Coder 3を使用）[2] によるワードの抽出とそれらの関連性についても記述することとした。抽出されたワードの出現回数から3回以上出現したワードを分析対象とした（図1）。

表4　コロナ禍の「夏のレクリエーションキャンプ」に参加している理由

B	子供は毎年キャンプを楽しみにしています。 過去に何度か参加し、子供にとって楽しい思い出だったからです。 子供の事を理解して頂いている先生、学生さん、保護者の方と活動する事は多少のアクシデントなども受け止めてもらえ、申し訳ないという気持ちより、何より安心感や前向きな気持ちで子供も親も一緒になって楽しく活動ができる場だと思っています。
C	子どもにとっては、普段の生活では味わえない体験や、人とのふれあい、経験ができると思われるから。また、無理に活動に参加しなくてもよいし、参加しない（できない）ことで、親も劣等感を持たなくても済む。ほっとする。 また、大人同士の交流も魅力の一つで、先輩の保護者の方からは、経験からのアドバイスを、近い年齢の保護者の方とは、悩みを共有できることが多いので。 もう少し、下の子が大きくなり、機会があれば、是非、泊まりで参加したい。
D	保護者である私たちの仕事が忙しく、どこにも連れて行ってあげられなかったため、宿泊して遊ぶ体験をさせたかった。
E	子供が楽しんで活動をしていました。周囲の先生や学生さん方も子供の事を理解して関わってもらえるので、子供が出来る範囲で無理をせず活動できる事が親も子も安心感があり参加した理由でした。 よく学校などから配られる夏休みキャンプは我が子にとってハードルが高く参加させたくても諦めなければいけなかったのですが、子供がありのまま大勢の方と関わりながら楽しく参加できるぽっぽのキャンプは貴重な体験だと思います。
F	昨年は心配しながらだったけれど参加して良かったと感じたから。 子どもが楽しみにしている活動だったこと、普段参加している集団活動が少ないこと、家族でしていないことだったから。
G	コロナ禍で家族以外の人との接触を避ける生活を続けてます。 この子達は、人の力を借りて手伝ってもらって生きていかなければいけないと思っています、家族以外の人に頼れる子を育てる場面で「学内支援活動」の存在はとても大きく、キャンプで1日接してもらえるのは子供にとって良いストレスでもあり成長できる機会です。 感染防止対策をしてあり、受け入れてくださるところがあれば！と言う思いで参加させていただきます。ありがとうございます。
H	以前参加したキャンプが忘れられないくらい楽しかったので、本人がまたとても楽しみにしているから。
I	子どもがコロナで余暇活動をかなり我慢していたことや、発達支援のプロにおけるキャンプの内容がどのようなものか楽しみだったので。
J	一番は子どもたちがこの上なく楽しみにしていること。 また、子供たちの特性を理解してくださるスタッフさんがサポートしてくださること。 コロナに一度家族全員で罹患し、リスキーな感染症という認識が薄れてきたこと。
K	1. 慣れない野外調理で、薪が燃えると熱で熱く感じることや、体が暑くなることなどを体感してほしい。 2. 日常では関わることがない人同士での集団生活で、チームワークで成し遂げる達成感を味わって欲しい。また周りがなんでもやってくれて結果上手くいったなどと甘え頼らずに、自分で考えてやってみることを経験して欲しいから。 3. そういったキャンプの体験を家庭内だけで催すのは難しいから。 4. 家庭ではできない経験を積んで欲しいから。 5. 宿泊部屋が1家族1部屋と割り振られていたり、食事は一方向を向いて摂るなどを予め知らされており、感染の心配が少し和らいだから。 6. 感染により重症化するような持病をもともと抱えていないため。もしもキャンプにより罹ってしまったなら仕方ないの一か八か。 7. コロナ感染を怖がることよりも、キャンプの体験を選択しないことの方が人生において勿体ないと感じたから、これも一か八か。
L	同じ問題を抱える家庭同士なので、説明なしで関わり合えるのは気楽。（定型のお子さん相手だと、子供の言動に必要以上に敏感になってしまう。相手に比べると、注意する場面が必然的に多くなる。注意せずに見守ろうと思っても、相手にどこまで理解してもらえているかが気になってしまう） また、キャンプは一家庭だけで始めるのはハードルが高く、皆さんと一緒にやれるのは魅力的。 あと、他の家族や事例を、父親にもみてほしい。 そして何より子供たちが心から楽しみにしている。父親も意外と、ピザを楽しみにしている（メニュー変更を残念がっていた）
M	コロナで楽しみにしていた遠足や運動会、プールの授業の中止があり、家族での娯楽も制限され、外で活動する機会がだいぶ減っていました。家でのYouTubeやゲームの時間も好きだけど、大好きな外で大きな声を出したり笑ったり、体を動かしてほしい気持ちがありました。コロナの心配はありましたが、今の年齢でしか感じられない事や、普段出来ない体験を、お友達もたくさんいる中で丸2日間させてあげたいと思いました。 コロナでいろんな催し（夏はお祭りや花火大会など）もなくなり、子供たちが体験できてない事がたくさんあるなと思います。 「学内支援活動」のキャンプでは、たくさんの「はじめて」を体験させていただいてます。
N	子供が参加を希望しています。また、私たちの状況を理解し、最大の配慮をしていただけているという信頼があります。もちろん、それでも、何時何処で感染してもおかしくないというリスクは承知の上で、子どもの社会体験、自然体験ができる機会として、参加させてもらっています。

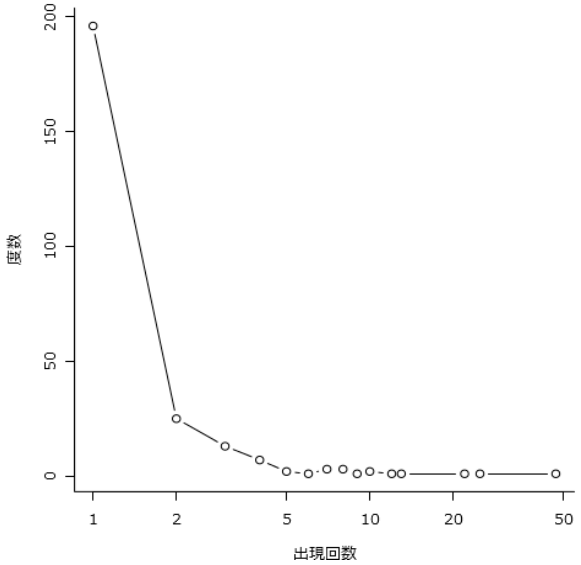

図1　キャンプ参加理由に含まれるキーワード出現数

表４の記述から「子どもの視点」「保護者の視点」でまとめる。まず「子どもの視点」に関する記述から、キャンプは、楽しく、参加しやすい活動と捉えていることが分かる。キャンプの活動内容は記述されていないが、これまでのキャンプにおける楽しい経験がキャンプに参加する意欲を高めていることは明らかである。また、学校の行事への参加が難しい場合にも、このキャンプであればボランティアの担当制や配慮ある活動が展開される為に、参加しやすいということが分かる。

次に「保護者の視点」として、キャンプに対して、特別な配慮への満足度の高さと安心・安全な余暇支援の体験といった回答が多かった。記述の中に、「劣等感を抱かなくてもよい」とある。これは普段の生活の中で引け目に感じる場面が実際にあることを示している。周囲がインクルーシブな視点を持っていたとしても、保護者本人は様々な活動を通して我が子の姿を見て、我が子の話を聞いて、そのように感じることがあるのだろう。その点、このキャンプでは、子どものことを理解したスタッフが活動内容やスケジュールを子どものペースに合わせるように調整している。さらに、同じ悩みを持つ保護者同士が集っていることでピアサポート的な対話が生まれ、保護者は総合的に安心感を抱いていることが分かる。また、保護者は野外体験や集団生活を通して子どもに多くを学んでほしいと考えているが、外泊を伴う野外活動を家庭内だけで実施することの困難さを感じている。それに対して、このようなキャンプ運営が保護者の思いを実現する一助となっているようである。

一方、テキストマイングから「子どもがキャンプを楽しみにしている」「集団生活や活動への何らかの期待」そして「コロナ感染への心配」といった記述が抽出されている。この結果について行動や言動などの表面化する内容については分析できたが、記述量の少なさ、またテキストマインドの性質から保護者の心情といった表面化されない情報があることが分かった。

これまで表１から表４まで記述の内容を整理、解釈してきた。しかしながら、これらの方法では、保護者の心情や思いを十分に理解することは難しかった。そこで、再度、回答を観点整理し（表5）、特に回答の理由に該当する部分については、保護者の心情や思いを表す言葉に置き換え、体験格差を保障する必要性や保障の先にある子どもへの期待等について論じる。

【設問①】コロナ前に行っていた（行う予定だった）体験活動と行っていた理由（目的）について、体験活動の種類としては、生活体験が最も多かった。実際の記述

表５　観点整理した回答

ID	コロナ前に予定していた活動	予定していた理由	コロナ禍で困難だった活動	活動ができなかった理由	コロナ前とコロナ禍で変わらない体験活動	活動が出来ている理由	コロナ感染のリスクを承知の上でキャンプに参加している理由
A			社会体験の記述	感染リスク予防			キャンプ未経験の為、無回答
B					生活体験の記述 自然体験の記述 社会体験の記述	活動が続けられていることへの安堵感	・子どもにとって楽しい余暇活動 ・子どもの特性を理解した支援 ・親子共に安心して参加できる場
C	生活体験の記述 社会体験の記述	子どもの成長への期待	生活体験の記述	心の余裕がない	生活体験の記述	子どもの特性を理解して工夫して活動を続けていることへの達成感	・子どもにとって貴重な体験の場 ・保護者が安心して参加できる場 ・他の保護者との悩みを共有できる場
D	特になし	子どもとのトラブル回避	自然体験の記述	感染リスク予防	社会体験の記述	活動を続ける為に家族が共通意識を持った安堵感	・子どもにとって貴重な体験の場
E					生活体験の記述	活動を続ける為に家族が共通意識を持った安堵感	・子どもの特性を理解した支援 ・親子共に安心して参加できる場 ・子どもにとって貴重な体験の場
F	生活体験の記述 自然体験の記述	子どもの成長への期待	特になし		生活体験の記述	偶然が引き起こした結果	・保護者が安心して参加できる場 ・子どもにとって貴重な体験の場 ・家族だけではできない活動
G	生活体験の記述 社会体験の記述	子どもの成長への期待	生活体験の記述 社会体験の記述	感染リスク予防	生活体験の記述	活動を続けられる条件が整ったことへの安堵感	・子どもの特性を理解した支援 ・子どもにとって貴重な体験の場
H			生活体験の記述	感染リスク予防	生活体験の記述	偶然が引き起こした結果	・子どもにとって楽しい余暇活動
I	生活体験の記述 社会体験の記述	子どもの成長への期待	特になし		自然体験の記述	偶然が引き起こした結果	・子どもにとって楽しい余暇活動 ・子どもの特性を理解した支援
J	社会体験の記述	子どもの成長への期待	社会体験の記述	コロナ感染症による活動制限			・子どもにとって楽しい余暇活動 ・子どもの特性を理解した支援
K	生活体験の記述	子どもの成長への期待	生活体験の記述 自然体験の記述	コロナ感染症による活動制限 本人の特性による活動制限 保護者の疲労感	生活体験の記述	子どもの特性を理解して工夫して活動を続けていることへの達成感	・子どもにとって貴重な体験の場 ・子どもの自立心を養う場 ・家族だけではできない活動
L	社会体験の記述	子どもの成長への期待	生活体験の記述 社会体験の記述	コロナ感染症による活動制限 本人の特性による活動制限 保護者の疲労感	生活体験の記述 社会体験の記述	子どもの特性を理解して工夫して活動を続けていることへの達成感	・他の保護者との悩みを共有できる場 ・子どもの特性を理解した支援 ・家族だけではできない活動 ・子どもにとって楽しい余暇活動
M	生活体験の記述い	子どもの成長への期待	生活体験の記述	コロナ感染症による活動制限	生活体験の記述 社会体験の記述	制限された活動に対する諦め感	・子どもにとって楽しい余暇活動 ・子どもにとって貴重な体験の場
N	生活体験の記述 （課題あり）						・子どもにとって楽しい余暇活動 ・子どもの特性を理解した支援 ・子どもにとって貴重な体験の場

においても体験の種類を羅列したものが多く、先に述べた表１の内容分析と同様で健常児であれば、意図的に学ぶことはなく、身近な人物を観察することにより学習していく。しかし、発達障害のある子どもの場合、意図的に生活内に体験活動を組み込む必要があり、その背景には保護者が無意識に健常児との違いを感じていることが窺える。【設問②】コロナ以前にやってみたいと思っていたけれど、実行できなかった体験活動と実行できなかった理由、【設問③】コロナ前とコロナ禍で特に変わらず行っている体験活動と変わらず行えた理由、の活動内容についても同様で、その多くが健常児であれば日常的に体験、あるいは発達に応じて自然と体験していく内容の記述となっている。その背景として【設問③】の理由の中に、コロナ禍で活動が続けられていることへの安堵感や家族全体が理解して生活体験に取り組んでいる様子、さらには子どもの特性を理解した上で、多くの工夫や配慮を必要としたことへの達成感などがある。このことは、発達障害のある子どもにとって日々の生活体験の積み重ねが発達にとって大変重要であり、その機会が保証されない場合には保護者は安堵感を得られない。保護者Mの理由にはそのことが記述されており、コロナ禍で体験が制限され、もはや体験することを諦めているといった感情が伝わってくる。

日常的な生活体験であっても発達障害児にとっては発達の次のステップにつながる重要な基本的なスキルにつながる体験であり、その体験が保証されないことは本人の損失だけに留まらず、保護者あるいは身近な人にとっても心理的な落ち込みにつながることを示唆している。

【設問④】コロナ禍の「夏のレクリエーションキャンプ」に参加している理由には、キャンプに参加する目的が書かれており、記述の文脈から「子どもにとって楽しい余暇活動だから」「子どもも親も楽しみにしている」「子どもの特性を理解した支援がある」「子どもにとって貴重な体験となる」「子どもも保護者も安心して参加できる」といった内容に分けられる。これらの記述を逆説的に捉えると、日常的に子どもにとって楽しく安心して参加できる活動は少なく、キャンプの存在が大変貴重であることが言える。さらに日常的にその障害特性が理解されないことが多く、たとえコロナ禍でなくとも体験が制限されていることが言える。

4. 考　　察

4-1）発達障害児の生活体験（コロナ禍を通して）

発達障害児の特性には個人差があり、それぞれの生活体験の内容は多種多様となる。その為、この活動を取り入れることが何かのスキル獲得に絶対に有効であるといったステレオタイプな支援方法は存在せず、何か一つの生活体験を行う場合も個別の対応を必要とする。今回の調査でも明らかとなったように、それぞれの子どもと保護者が実施している（実施しようとしている）活動は、それぞれの子どもや家庭の状況に応じた内容となっている。一方で活動内容は異にするものの、その活動の目的（活動する理由）には、「自立を目指す生活体験」という共通ワードを見出すことができる。健常児であれば観察学習等で獲得していく日常生活スキルを発達障害のある子どもの場合には意図的に生活内に組み込むことでスキル獲得へつながっていく。この積み重ねがいずれ自尊感情（自信）の高まり、さらには自立した生活に結び付くと考えられている。それだけに今回のコロナ感染症の及ぼした影響は大きく、通常でも生活体験の少ない発達障害児が行動制限されることでスキルを獲得する機会がさらに奪われる結果となっている。

4-2）キャンプ活動の意義

コロナ禍で実施が危ぶまれたキャンプだったが、子ども達とその保護者の強い要望も後押しとなり開催に踏み切ることができた。設問④の結果でも述べたが、キャンプに参加する理由の一つに体験格差の保障がある。渡部（2022）[3] は「障害を持っている子や生育環境に事情のある子どもは、自然体験の機会が極めて限られており、子どもたちの間に体験格差が生じている。」と述べているが、筆者自身も普段の保護者との対話の中で同様のことを実感している。コロナ禍であっても、ある程度のリスクは承知の上で、子どもに普段できない体験を味合わせたいといった保護者の心情が表われている。これは単に体験活動を求める声ではなく、体験格差を感じているからこそ出てくる期待と捉えることができる。このようなキャンプへの期待の背景には、キャンプでは日常的な体験格差を保障することのできる貴重な機会であり、その機会を失う訳にはいかないといった保護者の強い意志が感じられる。それが「コロナ感染のリスクよりもキャンプに参加することが大切」といった記述につながっているのであろう。さらに付け加えるとキャンプは貴重な体験の場という意味だけでなく、回答の中に「専門スタッフの存在」や「子どもを理解してくれるスタッフの存在」といった記述がり、子どもと保護者にとって安心して参加できることが重要であり[4]、キャンプは自分がそのままで価値のある存在だということが感じられる場[5]であることが示されている。そうして考えると、単なる自然体験としてのキャンプの役割ではなく、子どもの将来を見据えた貴重な生活体験の場であることが分かる。

5. 今後の課題

回答の中にブランク（未記入）が目立っていた。方法でも述べたが、調査の前に具体的な調査内容や用語の説明をしているにも関わらず、ブランクの多い回答となったのには、何らかの理由が考えられる。調査前の説明会の保護者の反応を見る限り、質問内容が理解できていないことは考えにくい。そうすると特に書くことがなかったという解釈になるが、生活体験が十分でないことに気付いていない可能性が考えられる。これらの課題を解決する為に、今後は生活保障の部分をより具体的にヒアリングできる個別のインタビューを実施することにより、保護者の不安感、子どもの将来への期待や不安を具体的に理解し、それを保障できる手だてを見出すことができるだろう。

6. 謝　　辞

本研究にご協力頂きました保護者の皆様に深謝申し上げます。本研究は西九州大学短期大学部飯盛研究奨励金（2022）による研究成果の一部であることも申し添えます。

引用文献

1）相田未希･武智未来･中島優杏･西村恭伽･山田遥香【川邊ゼミ】（2021）障害児キャンプにおける子どもの成長　～コロナ禍における保護者の期待と不安の中で～　令和３年度卒業課題研究抄録集，9-10.
2）樋口耕一（2020）『社会調査のための計量テキスト分析　第２版』ナカニシヤ出版.
3）渡部かなえ（2022）．発達障害・知的障害を持つ子どもたちの自然体験活動の意義と現状　神奈川大学人文研究，205，59-74.
4）竹内靖子・坂本昭裕（2018）「相互成長の場としての発達障害児キャンプ」野外教育研究，22(1)，37-49.
5）石田易司・竹内靖子・野口和行（2014）『自閉症と豊かな暮らし キャンプ・ロイヤルから学ぶ』晃洋書房